
彼と彼女と現実

桃山マサル

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

彼と彼女と現実

【Nコード】

N6175H

【作者名】

桃山マサル

【あらすじ】

五体不満足になってしまった彼女と、その彼氏の話。

ある日、彼女は片足と聴覚を失った。

原因は一ヶ月前の交通事故。彼女を含めた約四十人を乗せたバスが信号無視した大型トラックと衝突した。死者七人、負傷者三十人近くを出し、結構大きなニュースにもなった。

駆けつけた救急隊によると、彼女の右足は椅子の間に挟まれて潰され、頭からは血だまりができるほどの血が流れていたらしい。すぐに近くの病院に運ばれたが、右足はもはや治療の施しようがなく、やむなく切断した。脳の構造など僕に理解できるはずもなく、医者に説明されても意味不明だったが、とにかく頭部を強打して耳が聞こえなくなったということだけは分かった。

「命があるだけでも、不幸中の幸いでしよう」

彼女の彼氏という立場にある僕に対して、医者はその慰めの言葉をかけた。原形すらとどめていなかったという他の被害者の話を耳にしていた僕は、ただ頷いた。

今彼女は心身両方のリハビリを受けており、病室には面会謝絶の札がかけられている。彼女は非常に不安定な精神状態にあるらしく、僕はおろか家族さえ顔を合わせることは禁じられている。

学校帰りに病院に寄り、病室の前まで行くと、いつものように彼女のお母さんがいた。

「ハジメ君……」

僕を見てお母さんは疲れた笑みを浮かべる。何度も会ったことがあるが、あんなにやつれた顔になっているのは初めて見た。実年齢よりも十歳は年老いて見える。

「トモに……友美さんにはまだ会えないんですか」

「ええ、まだ自分のいる状況を把握しきれていないみたい。話ができないから余計に困難らしいわ」

「そうですか……」

僕は病室のドアの札を見る。僕はこれが外されることを本当に望んでいるのだろうか。心のどこかで、札がまだあることに安心して
いる。

彼女に会って何を言えればいいって言うんだ。

僕は――彼女と比べれば――この上なく幸せな日々を送っている。そんな僕が絶望の淵に沈みつつある彼女に何を言えるというのだろうか。どんな優しい言葉もきつと彼女を傷つけてしまうに違いない。

僕はお母さんに一言挨拶をして、家に帰った。

自室で制服を脱ぎ私服に着替えて、ベッドの上に転がった。天井の木目模様を見つめながら、僕の頭はぐるぐると濁った渦を巻いていく。

彼女と付き合い始めたのは半年前。向こうから告白してきて、特に断る理由もなかったので承諾した。今思えば軽率だったかもしれない。決して後悔しているわけではないが、真剣に胸の内を明かしてくれた彼女に対して、一人身であるという理由だけで承知してしまったことを悪いと感じている。

それにこの事態だ。

彼女が五体満足ではなくなってしまった今、もう自分は彼女を彼女と思えないのではないだろうか。僕の中の残忍な部分がこうしている時にも、それを助長するようにささやいている。

僕はそれに抵抗しなかった。むしろそのささやきを聞き入れ、無慈悲な思考をめぐらしていた。

不思議と罪悪感を感じなかった。

僕は彼女を愛していないのだろうか。

ベッドの上でずっと考えて、気がつけば僕は眠っていた。特に夢は見なかったと思う。

次の日、学校が終わり、僕は再び病院に足を運んだ。いつものように病室まで行くと、まだ仕事が終わっていない時間なのだろうか、お母さんの姿はなかった。

僕は病室のドアを見てドキリとした。

面会謝絶の札がない。

どうしようかと考え、すぐに答えは一つしかないことに気付く。何のためにここに来ているのか。もちろん彼女に会うためだ。

僕は唾を飲み込み、ゆっくりとドアを開いた。

部屋の窓が開いていてカーテンが揺れていた。奥にはベッドがあった。しかし彼女はいなかった。

僕は拍子抜けして、ドアノブをつかんだまましばらく呆然としていた。

窓には中庭の樹の緑。僕はすいよせられるように窓際まで歩み寄った。

空を見る。快晴だった。心地よい風がカーテンと僕の髪をなびかせた。

飛んでいってしまったのかもしれない。馬鹿げた考えだと自覚しながらも、僕はそう思った。片足をなくした代わりに神様が彼女に翼を与えて、彼女はこの窓からどこか遠くの空へ飛んでいってしまったのかもしれない。

そうだいいな、と希望する自分がそこにいた。

「……くっ」

うめき声、しかも聞きなれた声のうめき声が僕の耳をかすめた。

はっとして窓の下——ここは二階だから頭を窓から出して下の方を見た。

中庭、そこを右足の下半分がない彼女が歩いていた。松葉杖を脇に挟み、唇を噛んで、必死に前に進んでいた。

今にも転びそうなそのつたない歩行を見て、僕は何か叫ぼうとした。けど彼女の耳が聞こえないことを思い出して、やめた。

翼なんて生えるわけがない。彼女は片足をもがれ、地上を這い回っていた。

「あっ」

松葉杖をつく場所が悪かったのだろう、僕の見ている前で彼女が転んだ。

「トモ！」

僕は走り出していた。

階段を駆け下りて、脇目も振らず、一直線に中庭の彼女のもとへと向かった。彼女が倒れているのを見つけて、僕はその身体を起こしてやった。

「大丈夫か？」

無意識に発した自分の言葉に、僕は激しく動揺した。

大丈夫か？ さっきまで彼女がいなくなることを望んでいた僕が何言っているんだ。

僕は彼女を――

「ハジメ君？」

彼女が不思議そうに僕の瞳をのぞいている。

そうだ。僕が何を言っても彼女には伝わらない。彼女の世界での僕は無声映画さながらに口パクしているに過ぎない。

彼女の耳が聞こえなくなったという現実が、今初めて僕に現実としてのかかってきた。

そのとたん、僕の中で急激に罪悪感が膨張した。

彼女がこんな身体でこんなに頑張っているのに、僕は何を考えているんだ。僕はこんな利己的で残酷な人間なのか。

「……ごめん、トモ」

「？」

首を傾げるばかりの彼女を僕は抱きしめた。片足がない分だけ軽い。彼女はきよとした表情を浮かべた。

「ハジメ君、何？」

「ごめん」

僕の謝罪の言葉はもう彼女には届かない。

謝罪だけでなく、一生、僕の声を彼女は聞くことはない。

切なさや悔しさと、少しの自己嫌悪も混じって、僕は泣いた。

その涙に愛というものが含まれているのかどうかは分からなかった。

やっぱり利己的な涙なのかもしれない。

僕が泣き止んでから彼女のリハビリは再開した。

中庭を歩き回る。それが今の彼女にはどれだけ大変なことか、多少し分かるようになった。僕はベンチに座ってリハビリが終わるまで待っていた。それが何も言うことのできない僕のせめてもの償いのつもりだ。

彼女はリハビリが終わると僕のところに来て、

「どう？」

と尋ねた。僕は頷いた。

僕らは一緒に病室に戻った。廊下でも階段でも、僕は彼女を手伝ったりしなかった。彼女のためというよりも、額に汗を滲ませながら頑張っている彼女を、僕が助けるなんて差し出がましいと思ったからだった。

病室のベッドに彼女は腰をおろし、僕は横のパイプ椅子に座った。窓の外はほんの少し赤みを帯びている。

「明日も来るから」

僕はそう告げたが、彼女は全く反応を示さなかった。僕の顔を見て微笑んでいる。

その笑顔はどこか淡くて、もろくて、今にも消え入りそうなものだった。彼女があまりにも普通に僕に接するものだから忘れかけていたが、彼女は精神のリハビリも受けていたのだ。きっとまだ完全ではないのだろう。むしろ、完全ではないからこそ、このように平静を保っていられるのかもしれない。

いたたまれなくなった。

「トモ……また、来るから。きっと来るから」

僕は部屋を出るために立ち上がった。僕は臆病だから、彼女の笑顔を真っ向から受け止めることができない。

「じゃあね」

返事は期待していなかった。僕は踵を返す。

「ハジメ君」

彼女が僕の背中中に声をかけた。

僕は振り返らなかった。何故か彼女の顔を見ることがものすごく怖かったから。

「頑張ってね」

どうして彼女がこのときそんな言葉を言ったのか、僕には到底分からなかった。

これほど情けなくなる言葉は他にないな、と思った。

「……うん」

僕は首を大きく縦に振って、部屋を出て行った。

ドアと背中合わせになりながら、僕は「頑張ってね、か」と呟いた。

「やってやろうじゃないか」

僕は拳を強く握り締め、ひんやりとした廊下を大股で歩いていった。

＊おわり＊

(後書き)

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n6175h/>

彼と彼女と現実

2010年10月8日13時29分発行